

教科書教材に見るオノマトペ

——特徴の整理とそれを踏まえた読解指導との関連を目指して——

中 里 理 子*

(平成17年4月28日受付；平成17年6月7日受理)

要 旨

オノマトペは日本語の語彙の特色の一つであり、国語科の授業の中でも体系的に取り上げるべき語群であると思われる。本稿ではまずオノマトペの定義および名称について確認し、その上でオノマトペを指導する際に踏まえておくべき特徴について、教科書の例を挙げながら整理した。その特徴とは、オノマトペが直接的・感覚的な語群であること、その多くが個性的・創作的なものであること、意味内容が語音と語形に大きく関わっていること、語音と語形には共通感覚があることである。これらの特徴を理解することは、オノマトペを体系的に取り扱うことにつながるものである。最後に読解指導の中でオノマトペがどう関連するかを検討するために、小学校教材の「わらぐつの中の神様」を例に取り、オノマトペの効果を広く考え合わせることで登場人物の人物像と心情の読み取りがさらに深くなることを見ていった。

KEY WORDS

オノマトペ	Onomatopoeia	直接的・感覚的	Direct・Sensuous
個性的・創作的	Unique・Original	共通感覚	Sense in Common

はじめに

語彙面から見た日本語の特色の一つに、オノマトペ（擬音語・擬態語）の豊かさがある。オノマトペは一般の語と比べて感覚的な要素の強い語群であり、オノマトペを学習することによっても日本語の言語感覚を身につけることができるとと思われる。国語科の授業でオノマトペを取り扱うことは、学習指導要領に掲げられた「言語感覚を豊かに」するという国語科の目標に添うものであろう。

オノマトペに着目するというのは国語における語彙の力を伸ばすことにつながるが、国語科の指導においていわゆる国語力を高めることを考えたとき、その基盤の一つとなるのが言葉の学習、語彙の学習ではないかと思われる。平成15年に文化審議会によって報告された「これからの時代に求められる国語力について⁽¹⁾」では、「国語力」の中核を成す「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の基盤に「国語の知識」「教養・価値観・感性等」を挙げ、「国語の知識」の具体的内容の一つとして「語彙」を挙げている。「国語の知識」については「学校教育の果たす役割が極めて大きい」と述べられていることから、国語科の授業を通して語彙を豊かにすることが求められていると言えるだろう。

* 言語系教育講座

オノマトペの学習については、教科書教材に出てくるオノマトペを中心にオノマトペの体系的な学習をしたり、語彙の拡充をはかったりする取り立て指導が、既に十分な研究の基に行われている⁽²⁾。本稿では、オノマトペの学習を語彙の学習として独立させずに、読解指導や作文指導に関連させていくことを考え、その際に踏まえておくべきオノマトペの特徴について教材を例にとって整理し、読みの指導の中でどう生かせるかを考察する。

1 国語科におけるオノマトペの取り上げ方

オノマトペについては学習指導要領の中に具体的な記述はされていない。小野米一他(1999)でも触れられているように、小学校学習指導要領の解説では、[言語事項]の中の「語句に関する事項」に「言葉のリズム」「言葉の響き」「語感、言葉の使い方に対する感覚」と記述されている部分がオノマトペに関連するものととらえることができよう。また、中学校の学習指導要領でも「オノマトペ」は取り上げられておらず、広く「語彙に関心を持つ」「語感を磨き、語彙を豊かにすること」などの記述の中に含まれているようである。日本語の特色をとらえるうえでオノマトペの理解は欠かせないものであり、「類義語」「同音異義語」「多義語」などの語彙と同様に「オノマトペ」についても取り上げて学習することの必要を感じる。

小野米一他(1999)では小学校教材に見るオノマトペを学年毎に概観し、さらに教科書に付随する学習指導書の中でオノマトペがどのように扱われているかを調査している。学習指導書ではオノマトペを取り出して取り立てる指導はほとんど意図されておらず、読みの指導の中でオノマトペの効果を考える扱いになっており、そこから小野たちは「こうした指導は、母語としての日本語の経験的・直感的な言語習得に寄りかかったものであり、言語教育としての積極的方策とは考えられない」、「これがどのように系統的・発展的に計画されているかという点については、なお不明と言わざるを得ない」と指摘している。

山田丈美(2004)では中学生を対象にオノマトペの言語感覚を調査しているが、この調査によると「オノマトペの意味・内容を取り違えて理解している場合」が少なからずあることが見て取れる。オノマトペを取り上げる際、小野らの指摘するように「経験的・直観的な言語習得に寄りかかっ」たままでは、学習が学習として成り立っていないという事態に陥る恐れがあることがうかがわれる。

読解指導の中でオノマトペを取り上げる場合は、たとえば鶴田清司(1996)の「ごんぎつね」の指導例に見るように、文学的文章において登場人物の心情や状況、人物相互の関係を読み取る手がかりとしてオノマトペに着目するという扱い方になることが多いようである。一方、オノマトペを語彙指導として扱っているものにはたとえば甲斐睦朗(2002)がある。3年生の「きつつきの商売」の中では、きつつきが木を叩く「コーン」を取り上げ、「ゴーン、カーン、コン」との関わりからどのような音なのかを考える学習を組み立てている。「コーンとゴーンをくらべてみると、コーンのほうが音が(おもく/かるく)かかります」のように、二語ずつ比較することで、「コーン」と「ゴーン」という清音・濁音によるイメージの違い、「コーン」と「カーン」という母音によるイメージの違い、「コーン」と「コン」という語形によるイメージの違いを考えさせる、というように体系的に扱える方法を探っている。また同じく3年生の「三年とうげ」では、「えんえんなく」を取り上げて、他にどんな泣き方があるかを考えさせるという設問があるが、オノマトペが動詞と結びつく性質を利用してある語群を取り上げるという指

導を工夫している。

山田丈美(2000)では、オノマトペを通して教科書の詩教材を味わったり、自分の感覚や感触を表現したりする指導を試みている。オノマトペの感覚的側面を生かした表現指導は、詩作品だけでなく作文指導としても有効なものとなり得るだろう。

以上に見るように、教科書教材においてはオノマトペを言語事項の一項目としてまとめて学習する枠組みが作られているわけではない。多くは読解指導の中で心情理解や内容理解の手がかりとして取り上げられており、取り上げた語の周辺にあるオノマトペまで含めた語彙指導が行われている場合もある。本稿では、オノマトペを体系的に取り扱うことを念頭におき、文学作品における読み取りや表現効果に関わる語彙として、読解指導にどうつなげていけるのかを考察する。

2 日本語オノマトペの特徴

「オノマトペ」という名称が一般に使われ出したのは比較的新しい。そこでまずオノマトペの概念を確認することを兼ねてオノマトペの名称について整理し、次にオノマトペのいくつかの特徴について教科書教材(光村図書)を例に取って見ていきたい。

2.1 名称

『国語科 重要用語300の基礎知識』「Ⅷ 言語事項の指導」には「擬声語・擬態語(オノマトペ)」という項がある。ここではそれぞれの用語が以下のように定義されている⁽³⁾。

擬声語(オノマトペ)は、擬音語・擬態語の総称として広義に用いられることが多い。広義の擬声語は、〈中略〉聴覚的イメージを表す擬音語と、聴覚を除く感覚(視覚・触覚・味覚・嗅覚)的及び感情的イメージを表す擬態語に2分される。狭義の擬声語は、一般に擬音語と呼ばれる。自然音(物の発する音や動物の鳴き声など)をまねた語、つまり、聴覚的イメージを直接に表した語である。擬態語は擬容語とも呼ばれ、広義の擬声語から聴覚的イメージに関係するものを除いた残りすべてが該当する。

一般に、擬音語・擬態語の総称として「擬声語」「オノマトペ」の語を用いることが多いことがわかる。ただし、「擬声語」は「広義の擬声語」と「狭義の擬声語」という両面を持ち、広義の場合には総称として用いるが、狭義の場合にはいわゆる「擬音語」として用いられることから、混乱を招く恐れがある。現在では聴覚的イメージを表すオノマトペは一般に「擬音語」と呼ばれているため、「擬声語(広義)」をこれらの語群の総称として使用するのもよいのだが、そこに「擬態語」の概念が含まれることがわかりにくいいためか、昨今は「オノマトペ」の名称が多く用いられている⁽⁴⁾。オノマトペはフランス語由来の語であり、本来の「オノマトペ」の概念と日本語のオノマトペの概念にはずれがあると思われるが、発音しやすく、広義・狭義の擬声語の混乱も解消される利点がある。

擬音語と擬態語とを呼び分けていれば総称の必要もないのだが、擬音語と擬態語は確然と区別されるものでもない。たとえば「カサカサ」は「カサカサに乾いた肌」「落ち葉がカサカサ

と音を立てる」のようにどちらの用法もあるが、このように擬音語にもなり擬態語にもなる語は「ゴロゴロ」「ドンドン」「バタバタ」などいくつもある。また、「ピチピチはねる鯛」のように、はねる音を表す擬音語でもあり同時にはねる様子を表す擬態語でもあるような使われ方のものも見られる。聴覚的イメージであれ、それ以外の感覚イメージであれ、対象とそれを描写する語との間に「ある種のつながり即ち音象徴 (sound symbolism) が存在すると考えられる語群⁽⁵⁾」を総称する語があると扱いやすいだろう。本稿でも便宜を図り「オノマトペ」と称することとする。なお、擬態語の中で特に「感情的イメージを表す」語を「擬情語」と呼び分けることがある⁽⁶⁾が、外界の現象を描写する擬態語とは異なる性質のものとして捉えておくべきであろう。

2.2 オノマトペの特徴

一般語彙とは異なるオノマトペの特徴の中で、直接的・感覚的表現であること、個性的・創作的なものが多いこと、意味内容が語音と語形に大きく関わっていること、語音と語形には日本語としての共通感覚があることを取り上げて考えていく。

2.2.1 直接的・感覚的

オノマトペは物事を直接的・感覚的に描写する語なので、子どもの会話や子ども向けの童話などに多く見られると言われる。小学校1年の教材「ほくんちのゴリ」は何かを説明する、紹介するという文章だが、その中に以下のような一節がある。

さわると ちくちくする ひげが ある。
ぎざぎざ とがった はが、たくさん ある。

ゴリというペットの犬の様子がオノマトペで生き生きと表現されており、1年生の児童にも鮮やかにイメージされるだろう。

オノマトペは感覚的な表現であるために、教材の中では文学的文章に多く見られる。小学校教材は子ども向けの文章の類に属するので、その点でも必然的にオノマトペに着目することになるだろう。小学校4年の教材「ごんぎつね」は随所にオノマトペが見られ、そこからいろいろな読みにつなげられる。例えば以下の部分を考えてみよう。

兵十がいなくなると、ごんは、びよいと草の中から飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぼんぼんなげこみました。どの魚も、トボンと音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

これは、三日続いた雨がようやく上がって、わくわくしながら外に出てきたゴンが、兵十をみつけて、魚をとる様子を興味津々でじっと眺めていたが、兵十がいなくなると、さあいたずらだ！とうれしそうに飛び出てくる場面である。ごんのいたずらっ子でかわいい感じが「びよいと」というオノマトペでよく表されている。「ちよいと」もオノマトペなのだが、この語によってゴンに悪気がなくほんの出来心であったことが表されている。「ぼんぼん」投げ込む様子も、

何も考えずに無邪気に、せっかく兵十がとった魚を何匹も気軽な感じで川に投げ込む様子が表れており、「トボン」という音が描写されることで、確かに魚が水の中へ帰って行ってしまったことが、実感を持って感じられる。ごんの様子と心情が感覚的に読み手に伝わってくるのはオノマトペによるところが大きいと言える。

「ごんぎつね」のように文学的文章においてオノマトペが生き生きと状況を描写していることは言うまでもないが、文学的文章ではない場合にオノマトペがどのように現れるかということ、小学校5年の説明的文章教材「海に眠る未来」「宇宙を見たよ」を例に見てみよう。

今から五十年ほど前、海岸を散歩していたバング博士は、ぐう然、一ぴきのカブトガニの死がいを見つけ、足を止めた。見ると、体外に流れ出た血が、ゼリーのように固まっている。このことに強い関心を持った博士は、さまざまな実験をくり返した。そしてついに、カブトガニの血液から、大腸菌やコレラ菌にふれたときにゼリーのように固まる成分を発見したのである。
(「海に眠る未来」)

君は、深い海やプールの中にもぐったことがあるだろう。無重力の世界は、そのときの感じと少し似ている。水にもぐると、体が水の中でふわっとうかぶ。そのとき、まるで体の重さがなくなってしまったような気がしなかつただろうか。そして、ときどき、上も下もなくなったような気がしなかつただろうか。無重力はふわふわと、とても気持ちがいい。
(「宇宙を見たよ」)

一般に論理的な文章には感覚的で主観的なオノマトペは使われない。「海に眠る未来」の例のように、オノマトペを使わずに淡々と事実が語られる。バング博士が新しい成分を見つけた様子や血が固まる様子を「いきいきと」伝える必要はないからである。これがたとえば、「バング博士はふと見つけ、はっと足を止めた。」「ゼリーのようにプルンと」「あっと驚いた博士は」「ピンと来た博士は」などのようにオノマトペで描写される文章になると、まるで講談を聞いているような、妙な物語的雰囲気になってしまう。それに対して「宇宙を見たよ」という教材では、無重力を実感させるためにオノマトペを効果的に使っている。無重力状態は言葉で論理的に説明されてもよくわからないかもしれないが、「ふわふわ」という感覚を表すオノマトペによって、実際に体験したことがなくても体感したような臨場感を持って伝わってくる。

次の例は中学校3年の教科書教材「二つの悲しみ」の一節である。

「あなたの息子さんは、ニューギニアのホーランジャで戦死されておられます。」と答えた。その人は、その瞬間、目をかっと開き、口をぴくっとふるわして、黙って立っていたが、くるっと、向きを変えて帰っていかれた。

この文章の「その人は」以下をオノマトペを使わずに表すとどうなるだろうか。例えば次のような文章が考えられる。

その人は、その瞬間、目を大きく開き、口を一回小さく痙攣させるようにふるわして、黙って立っていたが、一回軽く回転するように、向きを変えて帰っていかれた。

このように、オノマトペで表現されていた内容を一般語彙によって表そうとすると説明的になり、そのときのその人物の瞬間的な心の動きが直接的には伝わってこない。以上の例からも、オノマトペは論理的・説明的ではなく、直接的・感覚的に伝える働きがあり、文章の中で効果的に使われていることが見て取れる。文学的文章はもちろん、説明的文章であっても、オノマトペがどういう場面でどのような効果を上げているかを、直接的・感覚的という観点から押さえておきたい。

2.2.2 個性的・創作的

オノマトペは自分のとらえた感覚を直接的に表現しようとするものであるために、個性的なオノマトペが創作されることが少なくない。特に詩歌などの韻文ではその傾向が強いが、散文の文学的文章にも見ることができる。次に挙げる例は宮沢賢治の「やまなし」である。宮沢賢治は独特なオノマトペを用いることで知られているが、小学校6年の教科書教材「やまなし」にも、他に類を見ないオノマトペをはじめ多くのオノマトペが使われている。

二ひきのかにの子供らが、青白い水のそこで話していました。

「クラムボン は 笑ったよ。」

「クラムボン は かぶかぶ笑ったよ。」

「クラムボン は はねて笑ったよ。」

「クラムボン は かぶかぶ笑ったよ。」

「かぶかぶ」笑うという表現は賢治独特の創作オノマトペである。これについて以下のようにいくつもの解釈が生まれている。

クラムボンの笑い声。かぶかぶという擬声語は、ぶかぶかの逆転したものだろうともいう。ぶかぶかと浮遊する状態を示す語を逆さにすることによって、沈む意味をこめた雰囲気を創り出しているのだという。

(木俣敏「『やまなし』(宮沢賢治)をとおして-教材研究のあり方-」)⁽⁷⁾

「かぶかぶ」はクラムボンの笑い方であるが、「プカプカ」でも、「プツプツ」でもない、かぶかぶ」ということばの持つ語感から、クラムボンのイメージを自由に広げ、のどかでユーモラスな様子を思い描くことができる。

(甲斐睦朗編『語句に着目した読み方指導3 文学教材小学校5・6年』)⁽⁸⁾

「クラムボン」という音も「かぶかぶ」という音も、川の流れが、石垣の空洞に当たって出す音でもあるような不思議な音である。水に潜ったときに、物の見え方や、音の聞こえ方が空気中とは異なり、何か外界と遮断されたような独特の感じを受けるが、この蟹の子供たちの会話を聞いていて感じるのは、その感じなのである。

(秋枝美保『やまなし』)⁽⁹⁾

「かぶかぶ」というオノマトペについて、指導書には擬態語と書かれているが、上に挙げた

ように擬音語と捉える見方もある。オノマトペは先に見たように、擬音語と擬態語の境界は曖昧であり、これもその例の一つである。解釈もいろいろあるが、カブカブという語音から、なんとなく明るい感じ、無邪気な感じ、ユーモラスな感じが伝わってくる。そこを押さえれば、後の細かい解釈はその範囲内で読み手が自由に感じればよいのではないだろうか。既成のものではないオノマトペについて自由にイメージを広げることは、語感を豊かにすることにもつながるだろう。

もう1例、「やまなし」の中から見たい。

そのとき、トブン。

黒い丸い大きなものが、天井から落ちてずうっとしずんで、また上へ上っていきました。

「トブン」についての解釈も様々あるが、多くは「トブン」と語形の似た「ドブン」「トブン」や少し変形させた「ザブン」「ドボン」、同様の働きをするオノマトペ「ピチャン」などと比較しながら解釈されている。

「そのとき、トブン。」私は、個人的にこの一文が好きである。それは、「ドブン」のように荒々しくもなく、あるいは「トブン」のように軽々しくもない。月光につつまれた静寂な水面に、熟れきったやまなしの実が、「トブン」と落ちる。まさにやまなしのもつ豊潤な温かさを擬声語一つでみごとに表現しているように思われるからである。

(前川清志「『やまなし』全授業の展開と研究〈感想〉」⁽¹⁰⁾)

「トブン」と落ちてくる「やまなし」は、豊かさ、やさしさを感じさせる。いきなり鉄ぼうだまのように侵入してくる「かわせみ」とは正反対である。かにの親子に夢を与えた「やまなし」の落下音としてこれほど適切なことばはない。そこで、「水の中へ何物かが落下した音」(ザブン、ドブン、ピチャン)などと比較して、「やまなし」の重さ、形をイメージ化させたい。そこから発展して、重さ、形によって音が違うことに気づかせることができる。

(甲斐陸朗編『語句に着目した読み方指導3 文学教材小学校5・6年』⁽¹¹⁾)

指導書でも「ザブン、ドブン、ドボン」などと比べたときの違いを考えさせるようにと導いており、類義表現の比較を通してやまなしの重さや明るさなどプラスイメージを捉えさせるようになっている。オノマトペはその語形や音と意味のつながりが大きい語群なので、このように語形や音の似通ったものと比較しながら意味を考えていくのは、周辺の語との細かい違いを確認でき、有効である。また「トブン」のように一般的には使われない、個性的なオノマトペの場合には特に、その意味を解釈する上でも有効であろう。

「トブン」というオノマトペは一般的ではないと書いたが、実は個人的なものとも言い難く、新美南吉作「二ひきの蛙」という作品の中にも使用例がある。作品中では「二ひきの蛙は、からだから泥土をおとすために、池のほうにいきました。池には新しくわきでて、ラムネのようにすがすがしい水がいっぱいたたえられてありました。そのなかへ蛙たちは、とぶんとぶんととびこみました。」のように使われており、意味するところは「やまなし」に見られる「ト

ブン」とほぼ同様と思われる。新潮社版CD-ROM「明治の文豪」「大正の文豪」、インターネットの電子図書館「青空文庫⁽¹²⁾」を検索した中で見られたのがこの1例のみだったので、一般的なオノマトペではないと考えられる。「やまなし」と「二ひきの蛙」での意味が同じなのは、創作的なオノマトペであっても、音や語形から自ずとイメージが定まることによるものである。そのために、読み手は初めて見るオノマトペであっても、それらを手がかりに作り手の意図した意味に近づくことができるのである。そこにはオノマトペの音や語形に対するある種の共通感覚が働いている。

オノマトペは時として創作的・個性的なものがあるが、それらの意味を押さえるには、オノマトペの音と語形に共通する感覚を押さえておく必要がある。

2.3 オノマトペと共通感覚

2.3.1 音の共通感覚

先に「トブン」の意味を考える際に「ドブン」を見たように、音の共通感覚の一つに〈清音と濁音の対応関係〉がある。「やまなし」の中に「きらきら」と「ぎらぎら」という清音・濁音で対応するオノマトペが出てくるのでその例を見てみよう。

そのときです。にわか天井に白いあわが立って、青光りのまるでぎらぎらする鉄砲だまのようなものが、いきなり飛びこんできました。
〔五月・かわせみ〕

そのとき、トブン。

黒い丸い大きなものが、天井から落ちてずうっとしずんで、また上へ上っていきました。きらきらと黄金のぶちが光りました。
〔十二月・やまなし〕

「かわせみ」には濁音の「ぎらぎら」が、「やまなし」には清音の「きらきらっ」が使われている。日本語のオノマトペの場合、清音（及び半濁音）と濁音とで対応するオノマトペは数多くある。「トントン-ドンドン」「こつん-ごつん」「カンカン-ガンガン」「キシキシ-ギシギシ」「さらさら-ざらざら」「ポキリ-ポキリ」などの例から清音（半濁音）と濁音の意味を考えてみると、以下のような対応関係が見えてくる。

清音 = 弱い・軽い・高い・鋭い・細い・澄んだ・・

濁音 = 強い・重い・低い・鈍い・太い・濁った・・

オノマトペを考える際に、音の感覚の一つとして、このような清音と濁音の関係を捉えることも有効だろう。「やまなし」の場合も「きらきら」の明るさ、軽やかさと、「ぎらぎら」のどぎつさ、強さを対比させて、5月に飛びこんできたカワセミのイメージと、12月に飛びこんできたやまなしのイメージの違いを考える手がかりにできる。

2.3.2 語形の共通感覚

オノマトペはいくつかのパターンがあり、創作的なオノマトペであっても多くがその枠内におさまると考えられている。語基を[A]とした場合には[Aッ][Aーッ][Aン]などの語形

が、語基を〔AB〕とした場合には〔ABッ〕〔ABン〕〔ABリ〕〔ABAB〕などの語形があり、一つの語基を中心に変形パターンのおノマトペがいくつか存在するものが多い。同じ語基から派生した型には、語形に伴う意味の共通性がある。たとえば語基を「す」とした場合の「すっ（と）」には促音の影響から瞬間的な素早さが、「すーっ（と）」には長音の影響から持続性が感じられるが、これは「さっ」と「さーっ」、「ぞっ」と「ぞーっ」にも通じるイメージである。また語基を「ころ」とした場合、「ころころ」は回転の連続性が、「ころり」は一回転して止まるイメージが、「ころん」は一回転に勢いが感じられる、などの感覚があるが、「くるくる」「くるり」「くるん」も「ぺろぺろ」「ぺろり」「ぺろん」なども同様のイメージを持つ。このようにオノマトペの語形による意味の違い、イメージの現れ方を押さえることで、教材の解釈につなげることができる。

次に挙げるのは中学校1年の教科書教材「麦わら帽子」の一節である。

小さなひとみの中に映る自分の小麦色の顔が、くしゃんとゆがんでべそをかいていた。

「くしゃんと」という語は国語辞典にも擬音語擬態語辞典にも載っていないオノマトペである。「くしゃんとゆがんでべそをかいていた」という表情を考えるためには、「くしゃんと」の周辺の語を考え合わせるとわかりやすい。「くしゃ（っ）」「くしゃくしゃ」という語は辞典類に載っているのもそれと比較することになるが、その際にオノマトペの語形による意味の特徴を考えるとわかりやすい。「くしゃんと」と「くしゃっ」との対応に合わせて、たとえば「どきん」と「どきっ」の違いを見てみよう。『現代擬音語擬態語用法辞典』によると、「どきん」は「鼓動の余韻をとらえた表現」とあり、「どきっ」は「鼓動の瞬間の印象をとらえた表現」と解説されている。これを「くしゃん」「くしゃっ」に当てはめて考えてみると、「くしゃっ」が瞬間的に顔をゆがめる様子だとすると、「くしゃんと」はゆがめた表情の余韻が残る、ゆがめた顔の表情が印象的に残って感じる、という表現であることがわかる。

この例のように、オノマトペが一般語に比べて音や語形と意味内容が大きく関わっていることを押さえて、そこからオノマトペの意味を体系的に捉えることができる。

3 読解指導とオノマトペ

国語科の指導の中でオノマトペを取り上げる場合、多くは語彙指導の形式で、あるいは読解指導の中で行うということになるだろう。先に触れたように表現指導の中で生かしていくことも可能である。ここでは、従来行われている読解指導の中のおノマトペの扱いを踏まえて、そこからさらに一歩進んで、オノマトペに着目することでより深く読みとれる事柄があることを見ていきたい。教材として小学校5年の「わらぐつの中の神様」を取り上げる。情景描写に関しては従来の見方に添うものなので省略し、人物像と人物の心情について考えていく。「わらぐつの中の神様」は「です・ます」調の語りの文体で書かれている。オノマトペが話し言葉に多く現れるという特徴がそのままうかがえる作品であり、オノマトペを通して人物を読み取る上で最適な作品である。まず人物像を読み取る例としておみつさんと大工さんを見てみよう。

人物像

〈おみつさん〉

- ・体がじょうぶで、気立てがやさしくて、いつもほがらかにくるくると働いていた
- ・はく人がはきやすいように、あったかいように、少しでも長持ちするようにと、心をこめて、しっかりしっかり、わらを編んでいきました。
- ・上からつま先まで、すき間なく、きっちりと編みこまれていて、じょうぶなことは、この上なしです。 (アンダーラインは執筆者。以下同じ。)

おみつさんの人物像を読み取るには上のようなオノマトベが手がかりになる。「くるくる」働くというのは、休みなくよく動き回る様子を表し、勤勉なおみつさんの性格が読みとれる。わらぐつを「しっかりしっかり」編む姿や、その結果「きっちりと」編まれたわらぐつなどからも、丁寧に一生懸命に仕事をする様子がわかる。働きもののおみつさんの丁寧な仕事ぶりを押さえておくことは、後に「使う人の身になって、使いやすく丈夫で長持ちするように作るのがほんとのいい仕事」という大工さんの評価につながるものである。

〈大工さん (おじいちゃん)〉

- ・そのわらぐつを手にとると、たてにしたり横にしたりして、しばらくながめてから、今度はおみつさんの顔をまじまじと見つめました。
- ・大工さんはお金をはらって、わらぐつのひもを慣れた手つきで結び合わせ、道具箱といっしょにひょいとかつぐと、さっさと行ってしまいました。
- ・そのとき、げん関のたたきで、カッカッと雪げたの雪をはらう音がしました。

「まじまじ」については、どんな様子で見たかという読みとして従来取り上げられているものである。しかしそれだけにとどまらず、この語から大工さんの人物像まで読み取ることができるオノマトベである。「まじまじ」で表される行為は一見ぶしつけな態度に見え、「じっと」見つめる以上に、好奇心をむき出して、大いに注目している様子が表れる。ここに描かれているのは物怖じせず真剣におみつさんを見つめる大工さんの一本気な様子であり、次に見るおみつさんの「おずおずしたようす」と対照的に描かれている。オノマトベを対照させながら、二人の関係も読みとらせたい。

また、次の「ひょいと」「さっさと」には、ひょいとかついでさっさと去っていく大工さんの颯爽とした感じ、こともなげなようすがよく表されている。先の「まじまじ」と同様に、おみつさんのおずおずした様子や、おみつさんが「やっと買ってくれた人がいた」とどきどきしている様子と対照的に描かれており、大工さんのかっこよさが印象づけられる表現である。おみつさんにとっては重大な出来事でも、大工さんにとっては大げさなことでもない、という受け止め方の違いを読み取ることができ、さらにここから、ちっとも売れないわらぐつを感心して買っていったくれた救世主のような大工さんの姿がおみつさんにどのように鮮やかに印象づけられたかがよくわかる描写となっている。

最後の「カッカッと」は、甲斐睦朗によって「おじいちゃんの男らしい一本気な性格、過去幾十年間のまっすぐな生き方などを表しているようである」と指摘されているものである⁽¹³⁾。おじいさんの威勢のいい仕草一つにも、その性格が表れるような描写がされているのだが、そ

れは、若い頃の大工さんとして登場したおじいさんの姿と重なっていることに気づかせたい。

オノマトペから人物像を読み取る例を見てきたが、次におみつさんを例に取り、オノマトペから心情がうかがえることについて考えてみたい。

心情 〈おみつさん〉

・「あんまり、みっともよくねえわらぐつで——。」と、赤くなりながら、おずおずとわらぐつを差し出しました。

「おずおず」については心情の読み取りとしてかならず取り上げられるオノマトペである。先に触れたように、大工さんの態度と対照的に、自分のわら靴に興味を持ってくれた人に対して、こんなわら靴でいいのかなというためらいの気持ち、今までずっと他の人に笑われていたわら靴に自信がなく、渡すのをためらっている気持ちを読みとらせるのにふさわしいオノマトペである。「おずおず」はもともと心情を表す擬情語であるため、ここから心情が読みとれることは言うまでもない。このように心情がわかりやすく表れているオノマトペ以外にもおみつさんの心情がうかがえるオノマトペがある。それが例えば以下のような部分である。おみつさんがあこがれるきれいな雪げたの描写である。

・白い、軽そうな台に、ぱつと明るいオレンジ色の鼻お。上品な、くすんだ赤い色のつま皮は、黒いふっさりとした毛皮のふち取りでかざられています。

ここは、指導書などで「色彩表現を巧みに使ってきれいな雪げたの様子が表れている」と指摘されるところだが、雪げたの美しさとともに、それがどんなにおみつさんの心を捉えたかを読み取ることができる。「ぱつ」というオノマトペは瞬間的にそこだけスポットライトを浴びたように鮮明に浮かび上がる様子をよく表している。その瞬間、おみつさんの視界には周りの物や風景がすっかり消えていて、目の前にある美しい雪げただけが鮮やかに映っている。見た瞬間に強く引きつけられた気持ちを読み取り、「ほしくてほしくてたまらない」おみつさんの気持ちが理解できるようにつなげられる描写である。

以上、オノマトペから人物像と心情が読み取れる例を見てきた。人物像に関しては、その人物の行動や人物にまつわるものを描写したオノマトペを全て見渡して、それらを関連させることで、オノマトペを通した人物把握をすることができる。また心情に関しては、心情を表すオノマトペ（擬情語）以外によっても、人物の心情を別の視点から捉えることができる。

お わ り に

オノマトペは子どもの表現に多いこと、話し言葉に多く表れることなどから考えても、国語科の授業の中でも積極的に取り扱うべき語群ではないかと思われる。文学的文章はもちろん、説明的文章の中でも、効果的に使われているオノマトペに関しては、オノマトペが生き生きと直接的・感覚的に物事を描写するという特色を十分に味わいたい。また、扱うに当たっては、オノマトペの特徴について理解し、音や語形の共通感覚に基づくものであることを踏まえて、体系的に取り上げていくことが望ましいだろう。文学的文章においては、個性的・創作的なオ

ノマトベも多く、それらの理解には体系的な捉え方が役立つとともに、作品全体に登場するオノマトベを相互に関連づけながら、人物描写や心情などを読み取ることができるだろう。オノマトベという語彙を手がかりにして読解を深めることも可能であると考えられる。

【注】

- 1) 平成15年11月25日 「これからの時代に求められる国語力について－文化審議会国語分科会報告案－」
- 2) 甲斐睦朗編『語彙指導の方法 [指導事例編]』（明治図書）など。
- 3) 大槻和夫編集『国語科 重要用語300の基礎知識』（p. 258）より抜粋した。
- 4) 他にもいくつかの総称が用いられている。たとえば比喩の一種という意味での「声喩」、音の象徴性を意味する「象徴詞」、擬音語と擬態語をそのまま合わせた「擬音擬態語」などがある。
- 5) 『国語学大辞典』（東京堂出版）「擬声語・擬態語」の項 p. 214
- 6) 金田一春彦が名付けたものによる。（浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』中の「擬音語・擬態語概説」）
- 7) 『「やまなし」（宮沢賢治）をとおして－教材研究のあり方－』『教育評論』474号 1986
- 8) 甲斐睦朗編『語句に着目した読み方指導 3 文学教材小学校5・6年』明治図書 1991
- 9) 秋枝美保『「やまなし」』『国文学解釈と鑑賞 特集宮沢賢治研究』61巻11号 1996
- 10) 前川清志『「やまなし」全授業の展開と研究〈感想〉』『実践国語研究』73 1987
- 11) 甲斐睦朗編『語句に着目した読み方指導 3 文学教材小学校5・6年』明治図書1991
- 12) <http://www.aozora.gr.jp/>
- 13) 『「わらぐつの中の神様」の温かさ』『実践国語研究』51

【参考文献】

- 秋枝美保 1996 「やまなし」『国文学解釈と鑑賞 特集宮沢賢治研究 新しい出発』61巻11号
 浅野秀之・常木政則 1993 『教材「わらぐつの中の神様」の実践と研究』日本ビジネスセンター
 浅野鶴子編 1978 『擬音語・擬態語辞典』角川書店
 大内善一 1989 『「わらぐつの中の神様」教材研究史研究』『秋田大学教育学部教育研究所研究所報』26号
 大槻和夫編集 2001 『国語科 重要用語300の基礎知識』明治図書
 大野眞男 1987 『「やまなし」の読み－その第一次的読みの一試行－』『実践国語研究』73号
 岡屋昭雄 1995 『宮沢賢治論－賢治作品をどう読むか－』おうふう
 小野米一、王婉宝、スーザン・ジェビット、田原佳世、張海蓉 1999 「小学校教科書に見る擬音語・擬態語」『鳴門教育大学研究紀要』14巻
 甲斐睦朗 1985 『「わらぐつの中の神様」の温かさ』『実践国語研究』51
 1991 『語句に着目した読み方指導 3 文学教材小学校5・6年』明治書院
 2002 『語彙指導の方法 [指導事例編]』光村図書
 川野理夫 2000 『小学校文学作品の授業 5・6年』えみーる書房

- 木俣 敏 1986 「『やまなし』をとおして－教材研究のあり方－」『教育評論』474号
- 坂口昌子 1995 「教科書にみえるオノマトペ」『国文 研究と教育』18号 奈良教育大学国文学会
- 皿海達哉 1996 「贈り物としての『やまなし』」『日本児童文学』42巻11号
- 鶴田清司 1996 『言語技術教育としての文学教材の指導』明治図書
- 原子朗編 1989 『宮沢賢治語彙辞典』東京書籍
- 飛田良文・浅田秀子 2002 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 前川清志 1987 「『やまなし』全授業の展開と研究 〈感想〉」『実践国語研究』73号
- 山田丈美 2000 「オノマトペに着目した児童詩の研究－実体を写し取る言葉の獲得－」『愛知教育大学大学院国語研究』8号
- 2004 「オノマトペに着目した中学生の言語意識に関する研究」『名古屋短期大学研究紀要』42号

Onomatopoeia to See in the Textbook Subject

— With the Aim of the Relation of the Reading Comprehension Guidance
Based on the Arrangement of the Characteristics and That —

Michiko NAKAZATO *

ABSTRACT

Onomatopoeia is one of the features of the Japanese vocabulary, and thinks to be the word group which may be taken up actively even in class of Japanese.

It was confirmed about the definition of the onomatopoeia and the name first, and put in order in this paper with giving the example of the textbook about the characteristics which should be understood when onomatopoeia is guided on that.

Those characteristics are four points of the following. Onomatopoeia should be direct, and be a sensuous word group. Much unique onomatopoeia concerning creation is to be seen. The semantic content of the onomatopoeia is to be concerned with the word sound and the word form greatly. There is to be the sense in common the word sound and the word form.

Lastly it was seen that a character's person figure and the reading comprehension of the feeling became deeper by taking the case of "God in the straw boots" of the elementary school subject and thinking about the effect of the onomatopoeia widely and putting it together to think how for onomatopoeia to relate in the reading comprehension guidance.

* Division of Language Department of Japanese Language